

論文

経験の重層的連環性

— プラグマティックな観点から

加賀 裕 郎

同志社女子大学・現代社会学部・社会システム学科・特別任用教授

**The Multilayered Linkage of Experiences:
From a Pragmatic Point of View****KAGA Hiroo**Department of Social System Studies, Faculty of Contemporary Social Studies,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special appointment professor

序論

近年の教育改革のキーワードには、アクティヴ・ラーニング、問題解決学習、プロジェクト学習、学習の個別最適化、協働学習、社会に開かれた教育課程、コンピテンシー等々のことばが含まれている。従来の教育学を下敷きにすれば、これらの概念は経験論的教育学の下位概念として理解されるであろう。アクティヴ・ラーニングは「為すことによって学ぶ (learning by doing)」に近いことばだし、PBL (project based learning, problem based learning) は経験学習の諸形態だし、学習の個別最適化は個性化教育、協働学習は民主的教育と言い換えることができそうである。

しかし近年の教育改革と関わって「経験論」が登場することは稀である。その代わりに登場するのが“Society 5.0”とか「第四次産業革命」などということばである。“Society 5.0”は第五期科学技術基本計画において登場した語句であり、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」¹と定義されている。また「第四次産業革命」とは、IoT、ビッグデータ、AIなどによってもたらされる技術革新のことである²。前述した教育改革関連のキーワードは教育学的文脈においてではなく、“Society 5.0”や「第四次産業革命」のための人材養成という観点から使われている。近年、経済産業省

が主導している「未来の教室」プロジェクトにおける学びのSTEAM化、学びの個別最適化、EdTechを活用した学びなども、教育というよりも経済という文脈で理解したほうが正確であろう。

しかし教育という視座から見ると、そのような教育改革にはさまざまな問題点が見えてくる。例えば児美川は、Society 5.0型教育に、四つの問題を見出している³。第一に、学習の個別最適化の学習プログラムやSTEAM教育の教材の多くは民間事業者が提供することになるが、その質はいかにして保証されるのか、また教育産業が学校に大幅に参入することにより教育の市場化は進むが、教育の公共性はいかにして担保されるのか。第二に学習の個別最適化によって、共同・協同的な学びの豊かさが失われ、学びがやせ細るのではないか。第三に教育課程が教科と探求によって編成され、特別活動が存在しないほどスリム化されると、シティズンシップ教育、キャリア教育を始めとする、子どもたちの人間的成長の機会が奪われるのではないか。第四に学習の個別最適化は、子どもの自律や自由の美名のもとで、実際には学びの自己責任化が進み、学力格差が拡大するのではないか。

児美川の批判の妥当性については別途、検討すべきだとしても、“Society 5.0”の手段としての教育は、教育学的観点からの批判的評価を必要とする。本論では評価のための座標軸を、再構築された経験論的教育学に求めたい。その理由の第一は、前述のように近年の教育改革のキーワー

ズが経験論的教育学に近い色合いを帯びているからである。第二に、我が国における近年の教育学研究において、これからの教育のあり方を構想するための中心概念を「経験」——とくにデューイの経験の理論——に求める言説が目にとまるからである。例えば西村健吾と田中智志はデューイの『経験と自然』における一次的経験（直接経験・原初的経験）と二次的経験（間接経験・派生的経験）の重層性、連環性のうちに、今後の教育学の可能性を見ている。二つの経験の様態のうち二次的経験の重視は、目的合理性の側面を過度に強調し、デューイの学習論を知識技能の習得に縮減する。逆に一次的経験の重視は、かつての「這いまわる経験主義」のような一次的経験の過大な目的化に帰着する。それに対して、デューイ的な一次的経験と二次的経験の重層性、連環性は、二次的経験における知識を一次的経験における全体によって批判しながら、「一時経験における『全体』への参与的なつながりを二次経験における『知識』においてたえず組み替えること」⁴ができる。西村と田中はデューイの経験理論のうちに、系統主義と経験主義の対立を克服する可能性を見ている。

松下良平もまたデューイの経験論とイギリス経験論を区別し、直接的経験と反省的経験が往還する運動としての経験の理論のうちに、21世紀の教育思想の可能性を見ている⁵。さらに我われもまた、経験論的教育学のために、改めて「経験の哲学」を再構築する必要があると主張したことがある⁶。我われが重視したのは経験の重層性という概念であるが、この概念は、経験の連環性や往還性と異なるものではない。何故なら、特にデューイの経験の理論の場合、経験を空間的—構造的位相から見ると、経験の重層性が際立つが、経験を時間的—運動的位相から見ると、経験の連環性、往還性が浮かび上がるからである。したがって経験を空間的—時間的に見るならば、経験は重層的連環性という特徴をもつ。

本論の課題は、経験の重層的連環性を明らかにすることである。経験論的教育学とは、経験の重層的連環性の解明を課題とする教育学である。この課題を果たすために、先ず感覚的経験（Empfindung）、体験（Erlebnis）、学習経験（Erfahrung）を含む経験の構造について考察する（第一章）。次にそれらの経験の連関を明らかにするための手掛かりとしてパースの現象学について検討する（第二章）。パースの現象学は彼のカテゴリー論を基礎に構築されているが、その第一性（Firstness）は性質（quality）と情態（feeling）からなる。しかしパースの性質と情態の理論は図式的なものに留まる。そこで第三章では、パースの性

質と情態の理論と関連性の深いデューイの性質の理論を検討することによって、経験の重層的連環構造について検討を深める。

デューイの性質の理論は一部のデューイ研究者には高く評価されるいっぽうで、その問題点が指摘される場合もある。そこで第四章では、デューイの性質の理論の問題点を、彼の経験の理論との関連において検討する。そして最後に経験の重層的連環性について総括し、今後の経験論的教育学の課題と展望を述べてみたい。

第一章 経験の重層的連環構造 —デューイを中心に

デューイは、「経験論の経験的概観」⁷において、経験概念の歴史的变化を考察し、その概念の三つの類型を示している。経験論の最も古い意味は、古代ギリシアに遡る。古代ギリシア人にとっての経験とは、「彼は経験豊かな人だ（He is an experienced man）」という文における「経験」を意味する。「経験豊か」とは、過去の人生行路において多くのものに関わり、それが記憶、習慣として沈殿しているということである。古代ギリシアの哲学者は、過去の経験の沈殿物は行動の指針を与える場合もあるが、その指針に合理的な理由はなく、確実な知識ではあり得ないと考えた。理性や合理性と経験は対立しており、信頼できるのは前者であった。

それに対して近代の経験論における経験は、過去の沈殿物ではなく直接的、無媒介的に与えられる知識の基礎であり、強制性（coerciveness）という性格をもつ。対立しているさまざまな見解に決着をつけるのは、強制性をもった感覚的経験である。それに対して理性はドグマを与えるものとして批判された。

古代と近代の経験論では、経験と理性の位置づけが正反対になっている。古代における経験は過去の記憶、沈殿物であり、知識の基礎とは見なされず、理性が確実な知識の源とされた。それに対して近代における経験は非歴史的、無媒介的な与件であり、知識の確実な基礎であったが、逆に理性はドグマに類するものであった。

デューイによれば、第三の経験論はW. ジェイムズとともに到来する。近代の経験論において、知識の妥当性を付与するのは非歴史的、無媒介的に与えられる感覚与件であった。それに対してジェイムズのプラグマティックな経験論においては、言明の妥当性は、その言明の起源によってではなく、未来の結果によって与えられる。デューイは、こ

の経験論を実験的習慣と結びつけて捉える。つまり言明の真偽は、その言明から導き出される結果を実験的に確かめることによって成立する。プラグマティックな経験論は実験的経験論という性格をもつ。

古代及び近代の経験論と実験主義的ないしプラグマティックな経験論の違いの一つは、古代及び近代の経験論が、経験を過去の沈殿物や非歴史的な与件に求めるのに対して、実験主義的ないしプラグマティックな経験論は、経験を実験から生じる結果に求めることである。実験の結果がどうなるかは事後的にしか確定されないので、実験主義的ないしプラグマティックな経験論は、オープン・エンドな過程を含意する。古代及び近代の経験論と実験主義的ないしプラグマティックな経験論のもう一つの違いは、前者にとって経験と理性は独立した起源をもつものに対して、後者にとって経験と理性は独立したものではないことにある。正当な区別は経験と理性の間ではなく、理知的な経験と非理知的な経験の間にある。

これまで我われは、経験論の三類型について瞥見してきたが、以下では近代の経験論（イギリス経験論）と実験主義的ないしプラグマティックな経験論に考察を絞ることにしよう。これら二つの経験論における「経験」について、R. B. ブランドムは前者の経験を *Erlebnis*（体験）または *Empfindung*（感覚）、後者の経験を *Erfahrung*（学習過程としての経験）と呼び、二つの経験の違いについて、前者の経験が「連合、比較、抽象といった作用を通して与えられる学習のための原材料」であるのに対して、後者の経験は「知覚と遂行の過程であり、その後遂行と査定が続き、それからいつその遂行が来るのであり、それは検証—操作—検証—出口という環をもつ反復的、適応的、条件的な枝分かれ」⁹、要するに学習過程である、と述べる。

ただしブランドムは *Erlebnis* と *Empfindung* を同一視しているが、本論では、それらを区別したい。というのも *Empfindung* は認識論的な基礎としての感覚与件に関わるのに対して、*Erlebnis* は行為主体と環境との全体的な相互作用を表すと見なすこともできるからである。*Erlebnis* の動詞形 *erleben* における *leben* は「生きる」を意味する。例えば、「東京旅行は私にとって忘れられない体験だった (*Meine Reise nach Tokyo war ein unvergessliches Erlebnis für mich*)」、「彼は地震の怖さを、身を以て体験した (*Er erlebte die Angst vor einem Erdbeben*)」という文における *Erlebnis* や *erleben* は、行為主体全体で受け止められた、前反省的経験を表す。

デューイの古典的論文「心理学における反射弧概念」の

概念を使えば、*Erlebnis* は、感覚運動調整 (*sensori-motor co-ordination*) あるいは回路 (*circuit*) と呼ばれるものである⁹。デューイはこれらの概念によって、従来の刺激—反応理論 (反射弧理論) を批判した。この理論によれば、直接に主体に入力される外部の刺激と、それに対する主体の反応は別個独立の単位と見なされる。それに対してデューイは回路ないし感覚運動調整を経験の基礎的単位と見なす。そうした回路ないし感覚運動調整における機能が刺激と反応である。

回路や感覚運動調整がスムーズに進行している場合、それは一次的経験、非反省的経験などと呼ばれる。しかし時として、回路や感覚運動調整が不調になる場合がある。その場合、何らかの方法でその不調整を解決ないし解消する必要がある。そのための方法も、例えばパースが「信念の固め方 (*The Fixation of Belief*)」¹⁰で挙げている固執の方法、権威的方法、先天的方法、科学的方法などがあるが、有効な方法は、不調の原因を明らかにし、その不調を解消するための仮説を形成し、その仮説を実験的に検証することによって、再構築された回路や感覚運動調整を再確立する。回路や感覚運動調整の不調から出発し、再構築された回路や感覚運動調整に至る過程は二次的経験や反省的経験と呼ばれる。

一次的、非反省的経験における不調から出発し、その不調が解決ないし解消された経験に至る過程が、単なる旧来の状態の再現ではなく、新たな調整の確立であるとき、その一連の過程は「成長」と呼ばれる。*Erfahrung* とは、一次的・非反省的経験の不調から出発し、反省的経験を介して、経験の意味と行為の制御能力を増した新たな一次的・非反省的経験への往還に帰着する、経験の動態である。「心理学における反射弧概念」のことばを使えば、*Erfahrung* とは、回路や感覚運動調整の不調から出発し、反省的思考の結果、よりよい回路や感覚運動調整に帰着する経験の動態である。ブランドムが言うように、*Erfahrung* は学習過程であり、デューイは学習過程における経験の意味と行為の制御能力の増大を「成長」と呼んだ。

D. C. フィリップスは、デューイにおける「成長」はドイツ語の *Bildung* (*self-development, self-formation*) にルーツがあると指摘し、*Bildung* に関する H. G. ガダマーの規定に言及する。ガダマーは次のように述べている。

Bildung の結果は技術的構築という仕方では達成されるのではなく、形成と陶冶という内的過程から成長し、それゆえ連続的な *Bildung* (*Weiterbildung*) の状態

にとどまる。この点で *Bildung* がギリシア語の *ピュシス* (*physis*) に似ているのは偶然ではない。自然のように、*Bildung* は自らの外部に目標をもたない¹¹。

ガダマーによる *Bildung* の規定は、デューイの成長概念と通底する。何故なら経験の連続的再構成としての成長の過程は、その外部に目的をもたないからである。

これまで我われは、*Erfahrung*、*Erlebnis*、*Empfindung* の基本的意味について考察してきたが、次にそれらの相互関係について検討していこう。まず *Erlebnis* は、レヴァインに従うならば、経験の基礎的意味として、「行為者が環境に作用すると同時に環境によって作用されることを通して、行為者が環境と相互作用する場合、時間的広がりのある感覚運動過程」¹²である。要する *Erlebnis* は、有機体と環境との能動-受動的関係である。有機体と環境の能動-受動的関係は時として不調整を来す場合がある。その場合、何らかの仕方ですその不調整を再調整する必要が生じる。再調整のあり方も多様であるが、時として反省的思考によって、経験の意味と行為の制御能力の増大を伴った再調整が行われ、「発展的学習過程」¹³が現れるとき、その経験の過程は *Erfahrung* となる。

それでは *Erfahrung* と *Erlebnis* はどのように関係するのであろうか。*Erfahrung* は一次的・非反省的経験を土台とし、そこで生じた不確定な状況を理性的に解決し発展的な学習過程が帰結する過程である。したがって *Erlebnis* は *Erfahrung* の不可欠の土台である。しかし *Erfahrung* の過程の開始とともに、*Erlebnis* は終わるわけではない。何故なら第一に反省的思考は *Erlebnis* の全体ではなく、その一部を対象とするのであり、その大半に関しては、自明のものとして、非反省的に経験されるからである。第二に反省的思考は、その思考に先立つ *Erlebnis* を対象とするが、当の反省的思考の過程自体は非反省的な *Erlebnis* だからである。つまり *Erfahrung* と *Erlebnis* は重層的構造をなしている。

それでは *Empfindung* は、どのように位置づけられるべきであらうか。先ず前述した回路ないし感覚運動調整と関わって考えてみよう。*Erlebnis* に相当するのは、回路ないし感覚運動調整が安定的に進行している状態である。しかし回路ないし感覚運動調整が不調になる時がある。その場合にはそれらを再調整する活動に移行するが、その時に初めて刺激と反応が試験的に設定される。つまり刺激と反応は各々、独立の与件ではなく、回路ないし感覚運動調整の再調整の過程で、相互に参照し合いながら同時に決

定される。

次に我われは、*Empfindung* を論理学との関りで検討しよう。経験論の伝統では、*Empfindung* は非概念的、非歴史的な知識の基礎である。しかしデューイは、非概念的、非歴史的な感覚与件を認めない。与件についてデューイは次のように述べる。

「与件」という語の厳密な意味で「与件」であるものは、全体的な場あるいは状況である。対象であれ性質であれ、単一のものという意味での与件は、現に存在する状況の特殊な位相、局面、あるいは構成要素であって、当面、ここで行われるべき探求に関して、その状況の問題的諸特徴を突き止め、同定するために選択されたものである。厳密な意味で、与件は与えられるよりも、むしろ採用される¹⁴。

つまり *Empfindung* は無媒介的に与えられるのではなく、探求の題材の制御における特殊な機能であり、*Erfahrung* としての学習過程の一機能である。

これまで我われは「経験」に関連する *Erfahrung*、*Erlebnis*、*Empfindung* の関係についての検討から、経験の重層的構造について明らかにしてきた。この考察から導き出される暫定的な結論の一つは、進歩主義教育か伝統主義教育か、経験カリキュラムか学問中心カリキュラムか、経験学習か系統学習かなどという二項対立が不毛だということである。従来の経験論的教育学は、学習過程である *Erfahrung* から切り離された *Erlebnis* を実体化し、それを教育の中心に据えた。しかしそのような教育は単なる活動主義、体験主義に過ぎず、子どもの成長を保証するものではない。逆に *Empfindung*、*Erlebnis* から切り離された教育は *Erlebnis* という土台を欠いた、言語の戯れに過ぎない¹⁵。

次に、経験の重層性に関する議論を踏まえて、西村・田中の言う、経験の連環性の基本的意味について考えてみよう。経験の連環性とは、一次的・非反省的経験と二次的・反省的経験の律動的な交替過程のことである。その過程が、経験の意味が豊かになり、行為の制御能力が増大するという特徴をもつならば、連環する経験は *Erfahrung* となる。経験の連環性は、先に引用したガダマーの *Bildung* についての言明、つまり「*Bildung* は形成と陶冶という内的過程から成長し、それゆえ連続的な *Bildung* の状態に絶えず留まる」という言明によつて的確に記述されている。*Erfahrung* は経験の外部から、もたらされるのではなく、

経験内在的過程の成就ないし完成として現れるのである。

ただし問題は、経験の連環性の内的構造はどのようなものである。この問題を解明するためには、まず経験は、つねに既に自己組織化されているという認識から出発しなければならない。自己組織化されている経験はつねに安定しているわけではなく、時々、不調をきたす。その場合、不調への対処がうまくいき、意味の豊かさと行為の制御能力の点で、従来よりも優れた自己組織化が成し遂げられたときに、Erfahrung としての経験が現出する。不調整の再組織化は、外部からの組織化ではなく、経験の内的過程からの自己再組織化であるから、経験は連環的な性格をもつことができる。

それでは、経験の自己組織化の主要な構成要素は何であろうか。それは習慣である。人間における習慣形成の基盤は可塑性であり、可塑性とは経験から学ぶ能力である。この能力を通して、ある経験から、後の状況の困難に対処できる力、具体的には習慣を獲得することができる。習慣とは「自然の諸条件を目的のための手段として使う能力」¹⁶である。習慣は行為主体の内部にあるものではなく、行為主体と環境の間にある。

デューイによれば、人間の成長あるいは Erfahrung としての経験は、習慣として現れる。何故なら習慣の獲得は力の獲得だからである。例えば自転車を操作する技能（習慣）の獲得によって、人間は必要な場合にはいつでも、自転車を操作して任意の目的地に行く力を獲得したのである。習慣は「心理学における反射弧概念」における回路や感覚運動調整に相当し、それが経験の連続的展開を可能にする。習慣は経験の連環性を可能にするものであるが、同時に習慣自身が重層的な性格をもつ。

低次の習慣は慣れ (habituation) である。それは環境や人や事物に対する、比較的受動的な習慣である。人びとは新しく住む町や住まいに慣れたり、新しく買った衣服や靴に慣れたりする。慣れとしての習慣は、「その時は修正することに関心をもちないが、我われの能動的習慣に梃子 (leverage) を与える、環境への適応」¹⁷である。デューイは、この文の意味を凡そ次のように説明する。一例として、新しく住む町に慣れることについて考えてみよう。最初はひじょうに多くの刺激があり、それらに対する不適切な反応がある。しかし次第に一定の適切な刺激が選取られ、他の刺激には反応しなくなる。これが慣れである。慣れたものは我われの意識下に沈殿する。それは Erlebnis の水準における習慣のあり方と言ってよいかもしれない。

慣れとしての習慣は比較的受動的な習慣であるが、それ

を梃子として、能動的な習慣が形成される。能動的習慣とは、与えられた環境に受動的に慣れるのではなく、環境を我われの目的に適うように修正することを通して、その環境に慣れるような習慣である。能動的な習慣とは、例えば荒野を灌漑し、作物を植え、動物を飼育する等の活動を通して、その環境に慣れることである¹⁸。さらにデューイは習慣の行動的・実行的側面に加えて、習慣の知的側面についても言及する。

目や手の習慣のなかに含みこまれる心の習慣は、目や手の習慣にそれらの意味を与える。なかんずく習慣における知的要素は、その習慣の、多様で弾力的な使用法との関係を決定し、したがって、連続的成長との関係も決定する¹⁹。

同じ行為の反復であるような習慣は、そのうちに知的要素が組み込まれていない習慣である。逆に習慣のうちに知的要素が組み込まれた知的習慣は、状況に応じて、習慣を柔軟に修正し、拡張して成長に繋げることができるのである。

以上の考察をまとめると、経験の連環性に深く関わるのは習慣であるが、習慣自体も受動的習慣（慣れ、馴化）、能動的習慣、知的習慣という重層的構造をなしている。受動的習慣は主として Erlebnis としての経験と結びついており、それを土台とした、能動的習慣、知的習慣を含む学習過程が Erfahrung としての経験である。

第二章 パースの現象学と経験の重層性

前章では、Empfindung、Erlebnis、Erfahrung という概念を手掛かりにしながら、経験論的教育学における経験の重層的連環性について考察した。我われは次に、経験の重層性について、さらに深く分析するために、パースの現象学における経験の理論について検討したい。パースの経験論との関りにおける現象学の意義については、R. バーンスタインの研究もあるが²⁰、本論では、経験の重層的連環性の解明という視角から、パースの現象学に接近してみたい。パースの経験の理論は教育学における経験論を論じたものではないが、経験の重層的構造を解明するための手掛かりを与えてくれる。

さてパースの経験の理論は、彼の現象学 (phaneroscopy) に見出すことができる。現象学とは「何らかの仕方、あるいは何らかの意味で、それが如何なるリアルなものに対

応するかどうかに、全く関わりなく、心に現前する、すべてのものの集合的全体²¹についての研究である。パースは現象を観察し、そこにいくつかのクラスを見出し、またそれらを記述しようとする。現象の諸クラスは「解けないほど混じりあっているので、どの一つも単離する (isolate) ことはできないが、それらの性格が異質であることは明らかである」²²。後述するように、パースは現象を三つのカテゴリーに分類するが、それら三つの性格は異なるものとして弁別することは可能であるものの、それらは各々、分離独立して存在するのではなく、混合して存在するとされる。

パースの現象学における三つのカテゴリーは、第一性 (Firstness)、第二性 (Secondness)、第三性 (Thirdness) と呼ばれる。カテゴリー論という観点から、第一性は一項的なもの (monads)、第二性は二項的なもの (dyads)、第三性は多項的なものであり、三項以上のものは三項関係 (triads) に還元される。第一性は一項的であるから、他の何かとの関係においてあるのではなく、その「自己完結性 (self-containedness)」²³において存在する。それは対象化された何かの経験ではなく、対象化以前の、経験のあり方である。パースは、第一性について「客観的知覚、意志、思考とは区別される情態 (feeling) において支配的」²⁴であるとか、「その単なる性質 (quality) あるいは態様 (suchness) は、それ自体は生起ではない」²⁵などと述べる。パースの現象学は主観や客観などという区別を括弧に入れた、現象についての学である以上、第一性における性質や状態は古典的経験論における第一性質、第二性質とは異なり、具体的な出来事以前の「単なる可能的なもの (a mere may-bes)」²⁶である。

パースが第一性の例として挙げているのは、「ぼんやりとした、客観化されていないし、ましてや主観化されていない赤さの感じ、塩味の感じ、痛みの感じ、悲しみや喜びの感じ、長く延びる楽音の感覚をもつ微睡んだ状態」²⁷である。パースが第一性ないし性質によって言おうとしているのは、まだ出来事として生起していない、単なる可能性である。「単なる性質、ないしあり方は、赤い対象をみることが出来事であるようには、出来事ではない。それは単なる可能的なものである」²⁸。

パースが出来事と呼ぶものは、第二性において現われる。第二性はカテゴリー論的には二項関係に関わる。例えばドアを開けようとノブに手をかけたとき、手にはノブの無言の抵抗が伝わる。ドアのノブに手をかけること (努力) とノブが努力に抵抗することという、努力と抵抗の関係、あるいは一般化すれば自我と非我の関係が第二性の基本的な

あり方である。パースは第二性には「闘争の要素」²⁹が含まれているという。つまり第二性においては、努力と抵抗、自我と非我が、それらを媒介する第三者なしに直接的に衝突する。

バーンスタインが指摘するように、パースの第二性はイギリス経験論における経験の意味を伝えている³⁰。経験論にとって言明は、直接に与えられる非概念的な経験に還元可能であるときに真理である。第二性における自我と非我の衝突は、経験論における知識の基礎としての経験を表している。

パースの第二性は *Empfindung* としての経験に、ある程度対応すると見なされる。しかしパースの第二性の特徴づけは、イギリス経験論の限界を明白にしている。何故なら第二性は努力と抵抗、自我と非我の二項関係であるが、知識を特徴づける三項関係ではないからである。二項関係は、それらの関係を解釈する第三項によって初めて認識的なものとなる。つまりイギリス経験論は、知識の基礎とはなり得ない二項関係の *Empfindung* を、知識の基礎となる資格のある三項関係の経験として、誤って解釈したのである。

パースは、後に W. セラーズが明らかにしたイギリス経験論の誤謬を、セラーズに先立って明らかにした。セラーズは、「本質的な点は、あるエピソードや状態を認識のそれとして特徴づけるさいに、私たちはそのエピソードや状態についての経験的記述を与えているのではない。我われはそれを理由の論理空間に、人が言うことを正当化したり、正当化できたりする論理空間に位置づけている」³¹と述べる。

「あるエピソードや状態」自体は、パース的には第二性であり非認識的である。「あるエピソードや状態」が認識的になるには、セラーズ的に言えば「それを理由の論理空間」に位置づけること、パース的に言えば、それを、解釈項を含む三項関係に位置づけることが必要である。イギリス経験論は非認識的な「ある状態やエピソード」(第二性)を知識の究極的基礎 (第三性) と見なしてしまったのである。

第三性はカテゴリー論的には三項関係であるが、その典型は記号であり、また哲学において第三性として重要なのは、「一般性、無限性、連続性、伝播、成長、知性」³²である。例えば我われが雲を見て雨を予想するとしよう。この場合、雲は雨を予示する記号として機能している。しかし雲と雨の指示関係は二項関係ではなく、厚い雲と雨を結びつける解釈項を媒介とする三項関係である。解釈項を介することによって、我われは厚い雲を見るときに、いつでも雨を予想する。第一性、第二性、第三性によって重層化された経

験が *Erfahrung* としての経験である。

以上のようにパースの現象学は経験の重層的・連環的構造をうまく説明している。それではパースは、第一性、第二性、第三性各々の関係について、どのように考えたのだろうか。それらの関係について、パースは解離 (*dissociation*)、切り離し (*precission*)、区別 (*distinction*) という概念を使って説明する。解離とは、二つの観念の結びつきが強くなり、いっぽうの観念を、他方の観念を思い浮かべることなく、思い浮かべることができることである。例えば赤い色を思い浮かべずに青い色を思い浮かべることができる場合、二つの色は解離している。切り離しとは、想像力においては分離できなくとも、概念において分離できることである。例えば色のない空間を想像することはできないが、色のない空間を考えることはできる。この場合、色の観念と空間の観念は切り離されている。区別とは、二つの観念の分離は想像することも考えることもできないが、区別はできることである。例えば高いものは低いものとの関係なしに想像することも考えることもできないが、高いものと低いものを区別することはできる。

パースは、解離、切り離し、区別という三つの概念を用いて、三つのカテゴリーを説明する。先ず三つのカテゴリーは想像力において解離することはできない。また三つのカテゴリーは各々から切り離すこともできない。他方、三つのカテゴリーを区別することは可能であるが、「各々のカテゴリーを他の概念から正確にかつ鋭く区別して、各々をその純粋性において把握し、しかもなおその十全の意味において把握することは、極めて困難である」³³。高さや低さは、各々その対のもう一方と関連づけないと、想像することも考えることもできないが、それらを区別することは可能である。逆に三つのカテゴリーは、区別はできるが、実際には相互に依存しあっており、各々は他の二つのカテゴリーとの関連なしには想像したり考えたりすることが極めて困難である。

以上のように、パースの現象学における三つのカテゴリーの理論およびそれらの関係についての説明は、経験の重層的構造のあり方の解明に、有益な示唆を与えている。我われの次の課題は、パースの三つのカテゴリーのうち、パースが第一性と呼ぶ、経験における性質や情態について考察を深めることである。第一性は *Erlebnis* としての経験に関わりが深いものであるが、性質、情態などの概念は、明確化することが困難であり、パースも必ずしも十分な明確化に成功していない。いっぽうデューイにとって、性質や情態の理論は、1920年代半ば以降、次第に重要性を増して

いったと考えられる。デューイは性質や情態の理論の深化の過程で、パースの性質や情態の理論に着目したと考えられる³⁴。パースの性質の理論は体系的に展開されていないので、次章では、デューイの性質と情態の理論に焦点を当てて、経験の重層的連環性の問題について追究したい。

第三章 デューイにおける性質と情態の理論

性質と情態は基本的には *Erlebnis* としての経験に関わるものであるが、三つのカテゴリーの相互依存性の故に、経験の重層的連環性の理論全体にも関わる。

前述したように、デューイの性質と情態の理論は1925年の『経験と自然』で展開され、1930年代の『経験としての芸術』や『論理学—探求の理論』でも考察された。デューイの性質の理論については、近年、優れた研究も存在するので、本論では経験の重層的構造の解明との関連に焦点を定めて、デューイの性質と情態の理論について考察する³⁵。『経験と自然』のなかで、デューイは次のように述べている。

言語から、帰属され推論される意味から区別して、我われは膨大な量の、最も微小で、震えるように繊細な本性をもった、無媒介的な有機体の選択、拒否、歓迎、排除、専有、退却、萎縮、拡張、高揚、落胆、攻撃、防御を、絶えず行っている。我われはこれらの行為の多く、または大半の性質については感知していない。我われはこれらの行為の性質を客観的に識別するとか同定しない。しかしそれらの性質は情態性質 (*feeling qualities*) として存在し、我われの行動を方向づける、巨大な影響をもつ³⁶。

この引用文は、人間の思考における前意識 (*subconsciousness*) の影響について述べたものである。人間は前言語的、有機体的な次元で、我われが感知していない夥しい行為を行うが、それらの具体的なあり方は「情態性質」と呼ばれる。こうした性質は、意識的思考においては、その思考の周縁 (*fringe*) として推論を導く。

デューイの前意識の捉え方は、S. フロイトではなく、アレクサンダー・テクニクの創始者である F. M. アレクサンダーの影響を受けている。アレクサンダーの考えでは、人間の身体的、心的な健康の危機は、無意識的水準での葛藤が原因ではなく、脳とか神経組織の機能と、消化、循環、呼吸、筋肉組織の間の葛藤が原因である³⁷。情

態は何を選択、強調し、追求すべきか、何を廃棄し、回避し、無視すべきかについての直観を与える。理性的人間とは、自らの直観をさらに明瞭にする人であり、直観的人間とは、自らの直観をある程度頼りにする人であるので、理性的人間と直観的人間の区別は程度問題である。前意識的なものには、人間が獲得した全習慣が反映されており、それらが個別的場面における情態性質として直観を形成し、それが言語的推論の周縁として機能する。逆に言語と結びついた意味は、有機体の情態に深い影響を及ぼす。「悪しきコミュニケーションは、(生来の)よい行動様式を墮落させ、したがって情態と前意識を歪める」³⁸。

以上のように、デューイは経験における、情態的・質的位相、推論的位相、パース的に言えば、第一性、第二性と第三性の相互作用を主張する。デューイはさらに、それらの相互関係について、情態的、質的位相の推論的位相に対する優先性を主張する。デューイは次のように述べる。

状況への指示によって制御されない言説は言説ではなく、無意味な混乱である・・・経験の論議領域は言説の論議領域の前提条件である。経験の論議領域が制御しつつ現前していなければ、およそ指し示された区別や関係の適切性、重要さ、整合性を決定するための、いかなる方法もない。経験の論議領域は言説の論議領域を取り囲み規制するが、言説の論議領域内に、それ自体として現れることはけっしてない³⁹。

この引用文は、言説の論議領域つまり反省的思考の発生と展開について述べている。反省的思考は、非反省的状況から発生する。状況全体は性質あるいは「質的全体 (a qualitative whole)」⁴⁰とも言われ、その心理的側面は「情態」と表現される。つまり性質は感じられる。

デューイは感じられる質的全体としての状況を「経験の論議領域」と呼び、その埒内から「言説の論議領域」が発生すると言う。「言説の論議領域」における反省的思考の過程において、「経験の論議領域」は常に「周縁」として現前しているが、それ自体は「言説の論議領域」に現れることはないという。しかし「言説の論議領域」に現れるはずのない「経験の論議領域」が、如何にして反省的思考の対象になり明示化されるのであろうか。その理由は「経験の論議領域」は「言説の論議領域」に含まれているからではないだろうか。この問いに答えるためには、デューイの経験の理論が、「経験の時間的发展 (the temporal development)」⁴¹を重視している点を確認する必要がある。

すなわち経験の時間的发展において、後続する経験は先行する経験を反省的思考において対象化し、その対象のうちに「経験の論議領域」を明示化することができる。しかし先行する経験を反省的思考において対象化している経験自体には、明示化できない「経験の論議領域」が「周縁」として現前しているのである。

以下では「経験の時間的发展」に着目しながら、経験の重層的構造について考察しよう。「経験の時間的发展」における非反省的経験と反省的経験の境界には、問題の実感がある。「問題は述べられる以前に感じられなければならない」⁴²。反省的思考は、感じられた問題を解釈し、それを定式化された問題へと変換することから出発する。感じられた問題の場面は「不確定な状況」、定式化された問題以降の場面は「問題的状况」であり、その移行は「経験の論議領域」から「言説の論議領域」への移行である。

「経験の論議領域」から「言説の論議領域」への移行には、感じられた問題の、明文化された問題への解釈が伴う。解釈の妥当性は後続する探求の過程、終局的には最終判断において確定される。「経験の論議領域」から「言説の論議領域」への移行とともに、「経験の論議領域」が消滅するわけではなく、それはつねに、「言説の論議領域」の「周縁」として現前している。デューイは「経験の論議領域」を「状況 (situation)」と呼んだうえで、「状況自体は述べられたり、明示化されたりしないし、そうできない。それはすべての命題的記号化において、当然のこととされ、『了解され』、黙示的なものとされる」⁴³と述べる。しかし状況が黙示的だとは、それが含蓄されているとか暗示されているということではなく、「徹頭徹尾、現前している」⁴⁴。状況の機能は、「言説の論議領域」における思考の諸項目を制御することである。

「経験の論議領域」と「言説の論議領域」の関係は、直観と推論の関係として捉えることもできる。直観とは状況に普及している性質の実感である。デューイによれば、突然の叫びや不意の発声は、単なる有機体の反応の場合もあるが、知的な意味をもつ場合もある。例えば優れた絵画を鑑賞した時の嘆賞は、知的な意味を含む。デューイは知的な意味合いをもつ悲嘆、感嘆などを「不意の叫びの判断 (ejaculatory judgement)」⁴⁵と呼び、これを質的思考の原初的形態だとする。

初発の直観は非言語的経験であるが、それは「経験の時間的发展」過程において対象化され、言語的に解釈される。「経験の時間的发展」は、「経験された素材が完成 (consummation) に向かう」⁴⁶過程であり、その過程が一応

の終結を見るときに、「経験をもつ (have an experience)」という表現が使われる。この場合の「経験」は *Erfahrung* としての経験である。*Erfahrung* としての経験は、「経験の論議領域」と「言説の論議領域」の、また直観と推論の相互作用の終局において実現される「統合的出来事 (an integrative event)」⁴⁷である。「統合的出来事」としての経験を目指す過程について、デューイは次のように述べる。

実際には、思考の経験においては、結論が判然とするようになるときに、初めて前提が出現する。経験は・・・題材の不断の運動の経験である。嵐の大海のように、波が次々に起こる。様ざまな思いつきが湧き出では衝突して砕け散ったり、波が協力して前に運んでくれたりする。もし結論に到達するならば、それは予想と累積の運動の結論であり、最終的に完成に至る運動の結論である。「結論」は分離した、独立したものなどではない。それは運動の完成である⁴⁸。

パースと比較すると、デューイの経験の重層的構造の理論は、経験のダイナミズムや連環性に重点を置いている。しかし、経験の情態的、質的、直観的次元と理知的、推論的次元の複雑な相互作用を主張している点で、パースとデューイは一致する。ただしデューイの場合に、パース以上に *Erlebnis* の位相、経験の質的、情態的位相が大きな地位を占めているように思われる。この点に関しては、現代の認知科学や神経科学の動向を踏まえると、一定の妥当性が認められる。例えばプラグマティズムと認知科学の境界領域で思索を展開してきた M. ジョンソンは、「人間の思考と意志は、大抵、意識の水準以下で作用し、しばしば直観的であり、高度にアフェクト負荷的な (affect-laden) 過程を含む」⁴⁹と述べる。

ジョンソンは道徳的推論と関わって、人間は単に「カント的動物」でも「ヒュームの動物」でもなく、つまり合理的で原理にしたがった自律的推論を行うわけでも、情動に駆動されるのでもなく、道徳的推論と判断では、感情が大きな意味をもつと述べる。そのうえでジョンソンは、デューイと、現代の神経科学者である A. R. ダマシオのうちに、深い類似性が認められるとして、次のように述べている。

如何にしてデューイが道徳的問題解決を、有機体—環境の相互作用における、感じられた緊張や重圧のある意識への反応における経験の再構成として記述したかを思い起こそう。同様にダマシオは、道徳的認識を、

その現在の身体状態を有機体がモニタリングする、生命を維持し、質を高める過程の内部に位置づけている⁵⁰。

しかし経験の質的、情態的位相に関するデューイの理論には、いくつかの欠陥があると指摘されてきた。章を改めて考察しよう。

第四章 経験の重層的連環性の理論における質的、情態的位相の問題点

古典的プラグマティストにとっての基本的概念の一つは「経験」であり、本論で検討している経験の重層的連環性の理論は、古典的プラグマティズムにおける基本認識の継承的發展である。しかし「言語論的転回」以後のプラグマティスト、とりわけ R. ローティや R. B. ブランドムは言語や推論を基本的概念とし、「経験」を基本的概念から追放する。「言語論的転回」以後の分析哲学的プラグマティズムと、古典的プラグマティズムの継承的發展である経験論的プラグマティズムとの間で展開される、経験の扱いをめぐる解釈は、現代のプラグマティズムの争点の一つである。この問題について、本論では経験論的プラグマティストの系譜のなかで理論を展開しているが、我われと近い立場に立つ現代のプラグマティストによっても、デューイの経験の質的、情態的位相の理論は批判される場合がある。そのなかで、本論では、R. シュスターマンを採り上げてみたい。

シュスターマンの批判の要点は、非言語的経験とその認識上の役割を重視する点で、デューイは正しい方向に向かっていたが、非言語的経験の意義を認識論的に、つまり非言語的経験を言語的認識の基礎として解釈した点で間違っていた、ということである。シュスターマンによれば、デューイによる非言語的経験の理論が際立って基礎づけ主義的になるのは、「質的思考」や『論理学—探求の理論』である。これらの論考では、直接に与えられる性質は「もたれる (had)」のであって「知られる (known)」のではないとして、基礎づけ主義が回避されるが、巧妙な仕方基礎づけ主義が再導入される。すなわち非認識的な「もたれる」経験は、個々の真理請求を正当化するのではないが、真理請求が出現する思考の整合性を基礎づけるために援用される⁵¹。

シュスターマンの批判を我われの論脈に位置づけて要言すれば、次のようになる。「言説の論議領域」を正当化するのには、その領域の内部にある言説であるから、非言語的

な「経験の論議領域」に属する性質や直観は、「言説の論議領域」に属する主張を基礎づけることはできない。しかし「経験の論議領域」の性質や直観は「言説の論議領域」の周縁として、つねに既に現前しており、様々な仕方、「言説の論議領域」を規制している。シュスターマンは、性質や直観が「言説の論議領域」を規制する仕方として、五つ挙げている⁵²。すなわち第一に、すべての思考は脈絡的であるが、当の脈絡が何かを決定するのは直接に経験された性質である。第二に、直接に経験された性質は、反省的思考が当該の脈絡の一部として同定し、使用する諸対象の区別と関係を制御する。第三に直接に経験された性質は、判断の適切性のセンスを与える。第四に直接に経験された性質は状況の基本的意味や方向性を決定し、経験の混乱した一般的流れにもかかわらず、それを一定時間支える。第五に直接に経験される統合的性質は、諸観念の連合を説明する唯一の適切な方法である。

シュスターマンによれば、「ここでデューイの根本的経験論は、超越論的論証によって正当化される基礎づけ主義的な現前の形而上学」⁵³に陥る。しかしデューイは質的現前の形而上学などに頼らなくとも、それと同等の機能を果たすものとして「目的実践の統一と習慣の連続性と方向づけ」⁵⁴を援用しさえすればよかった。確かに反省的思考は目的の実現に向けた運動であり、当該の目的との関連で、諸項の区別と関係は意義を与えられる。

シュスターマンによれば、デューイの本当の目的は基礎づけ主義的な質的現前の形而上学ではなく、美的である「非言説的経験」⁵⁵の重要性を強調することであった。デューイにとって美的満足が科学に対して優先するのであり、科学は美的満足を得るための条件を与える「侍女」である。デューイは、非言説的な身体的経験が認識的経験においても重要な役割を果たすと見なす。さらにプラグマティズムが単に実在を説明するのではなく、非言説的経験の改善を重視するのであれば、非言説的経験の価値は、実現されるべきプロジェクトとしても重要である⁵⁶。

デューイが非言説的な美的経験と、その経験の場所としての身体的重要性に気づいたのは、前述したように F. M. アレクサンダーの影響であった。アレクサンダーは、現代における病の多くが、高度な知的活動と基礎的な身体的機能の不調和から生じると考えた。人間は数千年にわたって知性の発展に取り組んできたが、身体機能に関しては古代から相続された習慣と本能のままであり、その不調整から様々な病気が生じる。「そのためにアレクサンダーは、身体意識、身体経験への新しい注意のための再教育を要求す

る、身体機能の再教育を主張した」⁵⁷のである。

シュスターマンは、デューイの性質の理論が、美的経験の理論や身体哲学の方向性を示すことを評価する一方で、その理論が基礎づけ主義的に解釈されがちであった点を批判する。パースの現象学と比較して、性質と情態が、デューイにおいて多様な機能を果たすことは確かであり、それらの機能のうちのいくつかは、確かに基礎づけ主義的に解釈できるものもある。シュスターマンの批判の是非を明らかにするためには、デューイの経験の理論や知識の理論における性質の理論の意義を確定する必要がある。

シュスターマンがデューイにおける性質の機能として挙げている、反省的思考の脈絡を決定するものとしての性質は、『実験論理学論集』では「状況」という術語で表現される。「状況」の原型はデューイの最初期に見出される。デューイの哲学的出発点は、経験の全体を普遍的意識と個別的意識の相互関係として体系的に説明する「心理学的観点」にあるが、これは観念論的形而上学の一形態と見なされる。やがてデューイはダーウィンの自然主義へと移行し、それに伴って普遍的意識や個別的意識と言う概念は消えていく。

デューイはヘーゲル主義的観念論者から経験的自然主義者へと、また有機体論的哲学者から経験的多元論者へと変化した。我われの見解では、1920年代後半以降、ヘーゲル主義的観念論、有機体論的哲学の名残が顔を出す場合がある。R. M. ゲイルは、デューイのこの面を捉えて「ジョン・デューイの秘密の神秘哲学」⁵⁸あるいは「一者 (the one) から流出する多 (the many) という、このプロティノス的一ヘーゲル的観念」⁵⁹と呼ぶ。初期のデューイは理性 (Reason) を実在としたが、後にそれを経験 (Experience) に置き換えた。大文字の経験はプロティノス的一者であり、「すべての二元論を解消することができる魔法の溶剤」であった。ゲイルは「ジョン・デューイの秘密の神秘哲学」を構成する原理として、「ハンブティ・ダンプティな直覚」「有機体」「内的関係」「連続性の原理」を挙げる。ここで「ハンブティ・ダンプティな直覚」とは、断片や部分を統一する実体として全体的統一が優先的に存在するという直覚である。これら四つの原理は何れも有機体的観念論に関わるものであるから、もしゲイルの解釈が正しいとすれば、デューイは大文字の経験を実在とする有機体論的観念論者だということになる。

ゲイルの指摘に該当すると思われる、デューイの表現をいくつか挙げてみよう。例えば「・・・性質の、支配的で全体に浸透する性質の無媒介的存在が、すべての思考の出発点であり、規制的原理である」⁶⁰、「全体に浸透する質的

なもの、すべての構成要素を全体へと結合するものだけでなく、唯一無二のものでもある。それは各々の状況のうちに、分割できず反復できない個別的状況を構成する」⁶¹。これらのデューイの文章は、確かにゲイルの指摘する「ジョン・デューイの秘密の神秘哲学」に該当するように思われる。シュスターマンが指摘するように、デューイの性質の理論が認識論的に果たす機能の一部は「目的の実践的統一と習慣の連続性と方向づけ」によって代替することができるであろう。

しかしデューイの経験の理論における性質と情態の理論は、経験の重層的連環性の解明のための重要な一歩であることは間違いなく、またその理論を基礎づけ主義的に捉える必然性があるわけでもない。パースの現象学における第一性、第二性、第三性の関係の理論は基礎づけ主義的ではない。したがってデューイの性質と情態の理論も、経験の重層的連環性の理論構築の一機能として解釈し直すことが可能だと思われる。

結論—総括と展望

本論を総括しつつ、本論から開かれる研究上の問題群を述べてみよう。

本論の問題意識は、近年の教育言説に頻出するアクティヴ・ラーニング、問題解決学習、プロジェクト学習、学習の個別最適化、協働学習、社会に開かれた教育課程、コンピテンシー等々の概念が、経験論的教育学と親和的であるにも関わらず、現実には「経験論的」という概念が登場することが少ない、という認識から出発している。前記の教育的概念は、経済産業省の未来の教室プロジェクトに典型的に見られるように、「第四次産業革命」や“Society 5.0”に対応する人材養成という側面が強い。前記の教育的概念が、教育的に妥当であるためには、それらが子どもの成長可能性を切り拓くものでなければならない。それらの概念が、固定された目的のための人材養成という観点だけから捉えられると、子どもの成長可能性の芽を摘む非教育的概念になる懸念がある。したがって近年の教育言説を教育学的に評価する観点を設定する必要がある。近年の教育言説が経験論的教育学に親近的な概念を使用することから、本論はそのような観点として「経験」という概念を設定した。

本論では、「経験」の意味を再設定するために、ブランダムの *Empfindung*、*Erlebnis* と *Erfahrung* という経験の二つの意味から考察を開始した。ブランダムによれば *Empfindung* と *Erlebnis* は学習過程の材料となる情報の、

外界からの入力であり、*Erfahrung* とは学習過程それ自体である。ただしブランダムは *Empfindung* と *Erlebnis* を同一に扱っているが、本論ではそれらを区別し、*Empfindung* を古典的経験論における経験と見なし、*Erlebnis* は有機体と環境の非反省的な身体的経験と考えた。*Erlebnis* としての経験において生じた問題を、反省的思考を通して解決する過程で、学習過程としての *Erfahrung* が出来る。そのような *Erfahrung* としての経験の結果、成長が生じる。デューイの成長はガダマーの解釈する *Bildung* の意味に近く、形成と陶冶という内的過程から形成されるのであり、その過程の外部に目的をもたない。

ブランダムを経験についての説明を出発点にしながら、我われは *Empfindung*、*Erlebnis*、*Erfahrung* を構成要素とする経験の重層的構造を明らかにした。また西村・田中の言う経験の連環性を考慮して、経験の重層的連環性にも焦点を当てた。経験の連環性は一次的経験・非反省的経験と二次的経験・反省的経験の間に成り立つが、それは「経験の時間的发展」という性格と深く結びついている。経験の重層性、連環性の双方に関連のあるのは経験における習慣の働きであるが、デューイの場合、習慣もまた、慣れとしての習慣、非知的習慣、知的習慣という重層的構造をなしている。

我われは経験の重層的連環性を明らかにしたのちに、パースの現象学の検討によって、経験の各層の特徴と相互関係を明らかにしようとした。パースの現象学は、主観—客観、実在—現象といった区別と関わらない、現象についてのカテゴリー論的研究である。パースは現象学的カテゴリーを第一性、第二性、第三性と呼ぶ。第一性は純粋な可能性であり、前言語的な性質や情態である。第二性はカテゴリー論的には二項関係であり、努力と抵抗とか自我と非我の関係を表す。古典的経験論における経験は、第二性に相当する。いっぽう第三性はカテゴリー論的には三項関係である。第三性の典型は記号である。その基本的特性は「一般性、無限性、連続性、伝播、成長、知性」である。

パースの現象学における三つのカテゴリーの相互関係についての論議は、論理的ではあるが実質的内容に乏しい。そこでデューイの性質の理論の検討を通して、経験の重層性の分析を深めようとした。デューイの性質と情態の理論は、経験の時間的发展を重視したものになっている。その結果、デューイにおける *Erfahrung* としての経験の理論は、「経験の論議領域」、「直観」、「性質と情態」と「言説の論議領域」、「推論」、「言語的意味」の相互限定による、一つの経験の「完成 (consummation)」に向けたダイナミック

スの理論という性格をもつ。

デューイの性質の理論はパースの第一性のカテゴリーの記述と比較して、豊かな内容をもつが、シュスターマンが指摘するように、古典的経験論において感覚与件に与えられていたのと類似した基礎づけ主義的な側面が含まれている場合がある。その背景には、ゲイルが指摘する「ジョン・デューイの秘密の神秘哲学」がある。デューイにおける「性質」は「すべての二元論を解消することができる魔法の溶剤」として機能する。ただし性質の理論の基礎づけ主義的解釈、連続性の過剰などの欠陥は克服不可能ではない。

最後に本論の成果と今後の課題を挙げておこう。

第一に、本論の考察を通して、近年の教育言説に登場する教育上の諸概念と、それらに基づく教育実践を批判的に評価するための準拠点を示すことができた。近年の教育言説と、それに基づく教育実践は、第四次産業革命を遂行するための人材養成という観点だけではなく、経験の重層的連環性に基づく *Erfahrung* としての経験、あるいは *Bildung* や成長のという観点から評価されるべきである。

第二に、経験主義教育学における経験とは、単なる *Erlebnis* としての経験や *Empfindung* としての経験ではなく、パースにおける第三性、デューイにおける「言説の論議領域」を含む重層的・連環的な経験である。この観点からは、これまで経験主義と呼ばれてきた教育理論や実践、例えば進歩主義教育には重大な欠陥がある。

第三に、経験の重層的連環性という観点は、知性と情動の相互関係を含意する以上、認知科学や神経科学の近年の研究成果と教育学との学問的協同の地平が開かれる。さらに近年の教育において人口に膾炙している非認知能力なども、単なる浅薄な流行に終わらせないために、経験の重層的連環性という観点から再解釈されるべきである。

第四は、近年のプラグマティズムの展開に関わる。20世紀後半以降、分析哲学とプラグマティズムの接近から、「言語論的転回」以後のプラグマティズムとして、言語中心的プラグマティズムあるいは「言語論的プラグマティズム (the linguistic pragmatism)」⁶²が登場した。その一人であるローティは哲学的分析の焦点を言語に置き、経験を不要な概念として放棄した。ブランダムもまた哲学的分析の焦点を推論におき、経験論を放棄して「推論主義 (inferentialism)」の立場に立つ。他方でローティやブランダムを行き過ぎと見て、経験論的プラグマティズムを維持しようとする人びとがあり、言語論的プラグマティズムと経験論的プラグマティズムは対立して現在に至っている。本論の立場は経験論的プラグマティズムにあるが、両

者の間の調停の観点が必要である。本論の経験の重層的連環性に基づく経験論的プラグマティズムは、そうした調停のための一視点を提供すると思われる。

以上、述べてきた研究上の成果と課題については、稿を改めて考察することにしたい。

注

- 1 https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/
- 2 <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/pdf/n3100000.pdf>
- 3 児美川孝一郎「GIGA スクールに子どもたちの未来は託せるか」『教育論の新常識』(松岡亮二編) 中公新書ラクレ、2021年、198-199頁。
- 4 西村健吾・田中智志「連関する二つの経験—デューイとともに教育を哲学する」『教育哲学のデューイ—連環する二つの経験』(田中智志編) 東信堂、2019年、335頁。
- 5 松下良平「来るべき教育思想へ—『経験の再構成』としての教育を再定位する—」『民主主義と教育の再創造—デューイ研究の未来へ』(日本デューイ学会編) 勁草書房、2020年、36-37頁。
- 6 加賀裕郎「『経験の哲学』の再構築に向けて」『教育哲学研究』第124号、2021年。
- 7 John Dewey, “An Empirical Survey of Empiricism”, *Studies in the History of Ideas*, ed. by the Department of Philosophy of Columbia University, Vol.III, Columbia University Press, 1935.
- 8 Robert B. Brandom, *Perspectives on Pragmatism, Classical, Recent, & Contemporary*, Harvard University Press, 2011, p.7.
- 9 Dewey, “The Reflex Arc Concept in Psychology”, *Psychological Review*, III, 1896, reprinted in *The Early Works of John Dewey*, Vol.5, Southern Illinois University Press, 1972, p.97.
- 10 Charles S. Peirce, “The Fixation of Belief”, *The Collected Papers of Charles S. Peirce*, Vo.5, Harvard University Press, 1978.
- 11 Hans G. Gadamer, *Wahrheit und Methode (Gesammelte Werke I: Hermeneutik II)*, J.C.B. Mohr, 1990, S. 17.

- 12 Steven Levine, *Pragmatism, Objectivity, and Experience*, Cambridge University Press, 2019, pp.13-14.
- 13 *Ibid*, p.14.
- 14 Dewey, *Logic: The Theory of Inquiry*, Holt, Reinhart and Winston, 1964, p.124.
- 15 デューイは進歩主義教育の代表的教育学者と見なされているが、実際には、デューイは進歩主義教育を厳しく批判した。デューイによれば進歩主義教育には社会的視野が欠けており、学校が社会生活と結びついておらず、子どもの興味に頼りすぎており、一貫した教育課程を保障しておらず、社会秩序の建設に寄与していない。Cf. Dewey, “Progressive Education and the Science of Education”, *Progressive Education*, V, 1928, pp.197-204. また加賀裕郎「欧米における『民主主義と教育』の受容と展開『民主主義と教育の再創造—デューイ研究の未来へ』(日本デューイ学会編) 勁草書房、2020年を合わせて参照のこと。
- 16 Dewey, *Democracy and Education*, The Free Press, 1944, p.46.
- 17 *Ibid*, p.47.
- 18 *Ibid*. p.47.
- 19 *Ibid*, p.48. 習慣の重層性については次を参照のこと。加賀裕郎「文化的自然主義の教育思想『教育哲学のデューイ—連環する二つの経験—』(田中智志編) 東信堂、2019年。
- 20 Richard Bernstein, *The Pragmatic Turn*, Polity Press, 2010, pp.129-136.
- 21 Peirce, *Collected Papers of Charles S. Peirce*, vol.1, Harvard University Press, 1978, paragraph 284.
- 22 *Ibid*, parag. 286.
- 23 *Ibid*, parag. 302.
- 24 *Ibid*, parag. 302. “feeling” の訳は米盛裕二氏に従った。パースの “feeling” は主観的感情ではなく、主観—客観以前の現象であることから、「情態」が相応しいと判断した。米盛裕二編訳『パース著作集1 現象学』勁草書房、1985年を参照のこと。
- 25 *Ibid*, parag. 304.
- 26 *Ibid*, parag. 304.
- 27 *Ibid*, parag. 303.
- 28 *Ibid*, parag. 304.
- 29 *Ibid*, parag. 322.
- 30 Bernstein, *Praxis and Action: Contemporary Philosophies of Human Activity*, University of Pennsylvania Press, 1971, p.181.
- 31 Wilfrid Sellars, *Empiricism and the Philosophy of Mind*, Harvard University Press, 1997, p.76.
- 32 Peirce, *The Collected Papers of Charles S. Peirce*, vol 1, paragraph 340.
- 33 *Ibid*, parag. 353.
- 34 デューイは1935年にパースの性質の理論についての論文を発表している。“Peirce’s Theory of Quality”, *Journal of Philosophy*, XXXII, 1935. パースとデューイの性質の理論は直接の関わりなく発展したと考えられる。1930年代にパースの論文集が刊行され、デューイがその書評を担当していることなどから、改めてパースの性質の理論に注目したのではないと思われる。
- 35 例えば、Gregory Pappas, “What Difference Can “Experience” Make to Pragmatism?”, *European Journal of Pragmatism and American Philosophy*, VI-2, 2014, pp.200-227/井上環「デューイ自然主義における質感—サブジェクト—意味の動態—メディウムとしての更新者—」『教育哲学研究』第121号、2020、74-92頁。
- 36 Dewey, *Experience and Nature*, Dover, 1958, p.299.
- 37 Cf. Jay Martin, *The Education of John Dewey: A Biography*, Columbia University Press, 2002, pp.285-286.
- 38 Dewey, *Experience and Nature*, p.300.
- 39 Dewey, *Logic: The Theory of Inquiry*, p.68.
- 40 *Ibid*, p.68.
- 41 Dewey, *Essays in Experimental Logic*, The University of Chicago Press, 1916, p.1.
- 42 Dewey, *Logic: The Theory of Inquiry*, p.70.
- 43 Dewey, *Philosophy and Civilization*, Peter Smith, 1951, p.98.
- 44 *Ibid*, p.98.
- 45 *Ibid*, p.102.
- 46 Dewey, *Art as Experience*, G. P. Putnam’s Sons, 1958, p.35.
- 47 *Ibid*, p.38.
- 48 *Ibid*, p.38.
- 49 Mark Johnson, *Morality for Humans: Ethical*

- Understanding from the Perspective of Cognitive Science*, The University of Chicago Press, 2014, p.73.
- 50 *Ibid*, p.79. ダマシオの情動理論については、差し当たり、アントニオ・ダマシオ『デカルトの誤り—情動、理性、人間の脳』（田中光彦訳）ちくま学芸文庫、2010年／同『意識と自己』（田中光彦訳）講談社学術文庫、2018年を参照のこと。
- 51 Richard Shusterman, “Dewey on Experience: Foundation or Reconstruction?”, *Dewey Reconfigured: Essays on Deweyan Pragmatism*, ed. by Casey Haskins and David Seiple, State University of New York Press, 1999, p.199.
- 52 *Ibid*, pp.199-201.
- 53 *Ibid*, p.202.
- 54 *Ibid*, p.202.
- 55 *Ibid*, p.203.
- 56 *Ibid*, p.204.
- 57 *Ibid*, p.205.
- 58 Richard Gale, “The Metaphysics of John Dewey”, *Transactions of the Charles S. Peirce Society*, 38(4), 2002, p.498.
- 59 *Ibid*, p.500.
- 60 John Dewey, *Philosophy and Civilization*, p.116.
- 61 John Dewey, *Logic: The Theory of Inquiry*, p.68.
我々は、デューイ哲学の内に隠れた「秘密の神秘哲学」によって、デューイの教育理論が、連続的成長を強調しすぎるとして批判したことがある。加賀裕郎『民主主義の哲学—デューイ思想の形成と展開』ナカニシヤ出版、2020年、277頁-312頁を参照のこと。
- 62 David Hildebrand, “Introduction”, *European Journal of Pragmatism and American Philosophy*, Vol.VI-2, 2014, p.6.